

答 辞

本日は令和三年度琉球大学大学院修了式にあたり、博士前期課程、専門職学位課程、そして博士後期課程修了生を代表し、ご挨拶を申し上げます。

世界的な新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、多くの催しが自粛を余儀なくされる中、西田睦学長をはじめ、諸先生方ならびにご来賓の皆様のご臨席を賜り、盛大な修了式を挙行してくださいましたことに、修了生を代表して心より深く感謝申し上げます。

思い返すと、博士後期課程で過ごした期間のうち、その半分近くは新型コロナウイルスと付き合いながらの研究生活でした。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、人や社会とのつながりが制限された状況が続き、

焦燥感を抱きながら、なんとか進めなければ
という思いで、研究に取り組んでいました。私
だけでなく、多くの学部生や大学院生が似た
ような状況だったと思います。

そのような中、無事に今日の日を迎えるこ
とができたのは、ひとえに指導教員をはじめ
とする諸先生方、大切な仲間や家族のおかげ
であると感じております。

私は学問への探求に魅せられ、好奇心の赴
くままに大学院の門を叩きました。博士後期
課程は、自ら選んだ学問を専門的に究め、体系
的な知識にすることが大きな醍醐味であり、
これまでの学部や修士課程の研究環境とは異
なり、自分の人生の中で「学び」に集中できる
貴重な期間でした。一方、多少大袈裟ではござ
います。博士後期課程は人生の選択を迫ら
れる機会も多く、先行き不透明な未来に漠然
とした不安を抱き、時に自身の判断が正しか
ったのかと、思い悩む時期もありました。しか

し、自らの判断を信じ、覚悟を決めて盲目的に取り組んできたからこそ、研究成果を博士学位論文として形にできた時には、大きな充実感と達成感がありました。

また、研究活動を通じて、多くの出会いがありました。特に、師と仰ぐ、理学部の古川雅英教授、弘前大学の赤田尚史教授との出会いは、研究者としての姿勢や思考力を形成する上で、大きな影響を受けました。また、研究を進めるにあたり、「面白いストーリーで書いてよ」という言葉が両先生の口癖でした。学位論文を書き上げた今でもその考えを体現できたかどうかかわりかねますが、これから新たにスタートする研究生生活、社会生活においても、面白さを追い求めていくことが私に課せられた宿題だと考えております。自由にのびのびと私らしく、研究を進めて来られたのは、紛れもなく、両先生方の暖かいサポートがあったからだと感謝しております。

琉球大学で学び培った学問とその専門性は
かけがえのない財産となり、人生を切り拓く
糧になると私は信じています。私たち修了生
はこの春からそれぞれ、新天地で目標に向か
って歩み始めます。新しい社会環境、生活環境
の中で、これまで学んだことを活かし、社会に
貢献できる人材になれるよう精進して参りま
す。

結びに、琉球大学のさらなる発展と、本日も
臨席を賜った皆様、またこれまで私たちを暖
かく見守り、支えてくださった家族、友人、全
ての方々のご健康とご活躍を祈念申し上げ、
答辞とさせていただきます。

令和四年三月十八日

修了生代表

理工学研究科 仲宗根峻也